

のかたちちいさくつくりて、口をかたくせしものなり、ふか田にいりて、水にひたりても、ホク
チのちめらぬためなりといふ、これ火うち筒といふべきものなり、又當國武兒玉郡にて、ホ
クチをいゝる、ものをヒゲンといふ、これは火打筒の轉せしなるべし。

〔寶藏四〕火打箱

夏官燧を鑽て火を改るに、春は東方の青に隨て、榆柳の火を用ひ、夏は南方の赤に隨て、棗杏の火
を用ゆるは、異朝の政令、周禮の古法と聞けれど、民間の火打箱といふは、其沙汰にも及ばず、七八
寸四方なる箱をまち／＼に隔て、鞍馬の石大佛の燧など取あつめ、鍋炭をた、かに入をき、毎日
火はけち／＼と打ならして、朝もよひ飢渴のたすけをぞうながしぬる、おもふに此火ひとり石
よりも出ず、かねよりも出ず、石とかねとた、かふ間に、ひとつ氣を生じて、玄かもいまだ質あら
ざるに、ほくちにうつりて、始て質をなせるこそおかしけれ、いでや此火の始は夢ばかりなるが、
その熾なるに至ては、宮室屋宇塔伽藍をもやきつくすこそおそろしけれ、又闇夜の大空をも
てらせるをおもへば、一句の下に發明して、格物致知のひかりより、治國平天下の道德にもいた
るべきこそたのもしけれ、たのむもあやな電の世に、石の火の身を持って、

石の火やめほしの花の一さかり

思奇金石觸生光 炊飯煮茶育萬方 湯殿行人体別火 古今天地一陰陽

〔倭名類聚抄十二燈火具〕燭 四聲字苑云、燭子結反、和名燭餘炭也、

〔倭訓栞前編二十八〕ほくそ 新撰字鏡に燭をよめり、火糞の義、新千載集に、沈のほくそと見えたり、
今ほくちといふ、火口なり、火朽にはあらじ、火引をいふ、ばんやいちびよしといへり。

〔類聚名物考調度十一〕ほくそ 火屑 今ほくちといふなり 火糞略

今案にほくそは火糞にて、又火屑とも書べし、クソとクズとは相通へり、萬葉集に、木糞木屑を共

ホクチ